

動植物をめぐる俗信とことわざと俳諧

篠原 徹

Folk Beliefs, Proverbs, and Haiku over Animals and Plants

SHINOHARA Toru

はじめに

- ①なぜ一行知識をあつかうのか
- ②経験知としての一行知識
- ③俳諧・俗信・ことわざの関係性
おわりに

【論文要旨】

本論文は日本の俗信とことわざおよび俳諧のなかに現れる他種多様な動物や植物の表現について、俗信とことわざおよび俳諧の相互の関係を論じたものである。こうした文芸的世界が華開いたのは、庶民にあつては「歩く世界」と「記憶する世界」が経験的知識の基本であつた日本の近世社会の後半であつた。俗信やことわざおよび俳諧は、近世社会のなかで徐々に発展していったと思われる。農民や漁民の生業や生活のなかでの自然観察の経験的知識は、記憶装置である一行知識として蓄積され人びとに共有されていった。この経験的知識の記憶装置である一行知識は、汽車や飛行機などの動力に頼る世界ではなく「歩く世界」を背景にした繊細な自然観察に基づいている。同時に一行知識は、そうした観察に基づく経験的知識を、活字化し書籍として可視化する世界とはまだほど遠く、記憶しやすい定型化した文字数に埋め込んだものである。

経験知としての一行知識は、大きくは動植物に関する観察による領域と人間に関する観察による領域の二つに分けられる。この経験知は基本的には生活や生業におけるものごとに対する対処の方法なのであるが、経験知は感性的な側面と生活の知恵の側面と生活の規範の側面の三つの方向にそれぞれ特徴的な定型化の道を歩んだのではない。感性的な側面は、季節のうつろいと人生のうつろいを重ね合わせる俳諧の世界を創造していく。生活の知恵の側面は、自然暦や動植物の俗信を発展させていく。生活の規範の側面は、人の生き方や社会のなかでの個のありようを示すことわざの世界を豊饒にしていく。俗信やことわざそして俳諧の世界に通底しているのは「歩く世界」と「記憶する世界」で醸成された一行知識であり、それを通じて三つの領域は親和性をもっているといえる。

【キーワード】俗信、ことわざ、俳諧、一行知識、「歩く世界」、「記憶する世界」、観察